

中村高校だより

第 247 号

愛知県立中村高等学校PTA
名古屋市中村区菊水町1-2-18
TEL 052-411-7760



あきらめない “自分力”

PTA会長 関口 啓介

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。これから皆さんがそれぞれに旅立つ社会は、決して生易しい世界ではないと思われます。世界の名だたる学者や実業家が今後の社会の激動を予測しています。これからは想定外を乗り越える予定調和の時代に入っていると思っています。そこに皆さんの可能性が秘められていると思います。

皆さんの可能性を引出す力は、あきらめない“自分力”にあります。目標や夢を掲げることは誰にでもできますが、それを諦めずに継続し続けることは一部のみにしかできません。多くの人は失敗にくじけてしまうからです。失敗の無い人生などないでしょう。しかしその失敗から何を学び、如何に立ちあがるかが大切なのです。

あきらめない“自分力”を支えるのは感謝と謙虚だと思います。私たちの身体は世界中のお金何千兆円を集めても作ることができません。世界中のお金よりも皆さんの身体には価値があることを知り感謝をください。水が低いところに集まるように、謙虚で低い心遣いや姿勢があれば智恵や知識を蓄え信頼をも培うことができます。この二つがあれば、失敗からも謙虚に学び、自らの成長のために失敗にすら感謝できるようになるでしょう。

これから新しい世界に挑戦する皆さんを数々の失敗が待ち受けていると思われます。あきらめない“自分力”で今の自分を超えて可能性を引出し、輝く未来を手繰り寄せてください。



【岩手大会に出席したPTA役員】

The sky is the limit

校長 小菅 順一

第61回卒業生の皆さん、卒業おめでとう。また、保護者の皆様にも、お子様のご卒業を心からお祝い申し上げます。

「英気の泉」、「夢わくところ」、「自主の庭」という校風のもと、本校を舞台に繰り広げられた3年間の「中村物語」はこれで終了し、皆さんの「中村物語」は、それぞれ次のステージに進みます。

新たなステージに立つ皆さんに、今年度一番印象に残った「The sky is the limit」という言葉を贈ります。これは、昨年8月PTA役員の皆さんと出席した全国高等学校PTA連合会岩手大会で、村上雅人芝浦工業大学学長が行った基調講演の演題(サブタイトル)です。

超伝導工学を専門とする科学者である村上雅人先生は、「科学は万能ではない」ことを謙虚に受け止めた上で、若者には無限の可能性があるというメッセージとしてこの言葉を使われました。空(sky)が限界(limit)ですから、無限の広がりを持つ空には限界がありません。未知に挑戦する人類(若者)にとって、可能性は無限である。村上雅人先生は、講演でこう強調されました。

限界というのは、自分の心が決めているのかもしれませんが、「どうせできない」、「やるだけ無駄」と挑戦しなければ、自分から可能性を放棄することになります。無限の可能性を信じて挑戦することが、「The sky is the limit」です。

空(sky)は、「自分の心」だと思います。

講演では、ロケット工学創設の父ゴダードの有名な言葉も紹介されました。併せて、卒業生の皆さんに贈ります。

「昨日の夢は、今日の希望となり、そして明日の現実となる」

第61回 卒業証書授与式 によせて

自分に誇りを持って

3年生保護者 石田 智子

卒業おめでとうございます。
思い起こせば3年前、期待に胸を弾ませて中村高校の門をくぐったことでしょう。今度はその門を出て、それぞれが一步步大人の社会に飛び込むことになります。今までのように先生がフォローしてくれるわけではありません。18歳から選挙権を持つことにもなり、いろいろな面で今まで以上に自己責任の重要性を感じるようになってくるでしょう。

しかし、怖れてばかりでは前に進めません、今しか出来ないことを精一杯、失敗を恐れず、後悔をしないように自分の意志で突き進んでください。失敗してもまたやり直せばいい。自分がブレなければ、わかってくれる人はきっと現れると思います。

中村やそれまでに会った友だちはもちろん、これから出会う友だちを大切に、いざとなったときに心の支えになり、一生付き合える友だちを見つけてほしいと思います。

そして、人の気持ちがわかる優しさと芯の強さを合わせて立派な社会人に成長してくれることを願っています！

三年間の思い出

3年生 山田 実優

中村高校での三年間、長かったようであつという間に時が過ぎました。楽しいことも辛いこともありましたが、忘れることない良い思い出がたくさんできました。

私は三年間、バドミントン部に所属し、部長を務めました。人数が多くまとめていけるか不安だったし、練習がきつくなりやめていく部員もいて、部長としてどうするべきかと悩んだ時期もありました。ですが、一緒に残って頑張ってくれた部員の支えのおかげで色んなことを乗り越え、引退までやり遂げることができました。顧問の先生にはたくさん迷惑をかけてしまいましたが、最後まで熱心に指導していただきました。おかげでバドミントンを本気で楽しくやることができました。とても感謝しています。こうやって何かに一生懸命になって頑張れたことは良い経験になりました。

中村高校で学び、経験したことをこれからの将来につなげていきたいです。そして、三年間の思い出と出会った友達を大切にしたいです。

中村高校に入学してよかったと心から思います。

とりあえず、頑張ろう

教頭 金子 悟

私は、陸上競技と関わってきたおかげで、自分の「今」があると思っています。

でもその関わり方は適当で、とても褒められたシロモノではありません。そもそも陸上部を選んだのは、雨が降れば練習は休みだろうと思ったからでしたし（ただしこれは間違い）、その練習は辛く絶対に高校でやめようと思っていました。ところが最後の大会のゴール直前でコケてしまって次の大会へ進めず（この晩は大泣き）、未練がましくまた大学で陸上部に入ったら部員はほとんど全国大会クラス（レベルの違いにびっくり）、早々に2年生で戦力外通告？ を受けマネージャーになって部のために働けと言われる始末（この晩も大泣き）……、とまあこんな具合です。

カッコ悪い陸上部時代でしたが、ただゴール前でこんなおかげで陸上競技との関わりを続けることができ、マネージャーになったおかげで人のことを考える大切さを知り、それが高校の教員に「なりたい」から「なろう」という強い決心につながるようになりました。陸上を通して多くの大切な人と知り合うこともできましたし、ついでに言えば妻もその中のひとりです。

頑張っているのもいいことばかりではありません。むしろ失敗や辛いことの方が多いでしょう。でもその時は嫌でも辛くても、とりあえず頑張りを続けていると、知らないうちにそれが人生の糧となり、幸せの礎になっているということは、案外たくさんあるものです。

卒業生の皆さん、どうか辛いこと失敗することを怖がらないでください。それはあなたの可能性を拡げてくれる、貴重な経験なのです。

良き人生を。卒業、心からおめでとう。

はなむけの言葉

教頭 伊藤 正明

61回生の皆さん、卒業おめでとうございます。

早い人は1か月後に、そして大多数の人は2年後から4年後には仕事に就いて、社会の一員として活躍していることと思います。中国経済の減速、株価の乱高下、原油価格の値下がり、サウジアラビアとイランの対立など、日本経済に悪影響を及ぼしかねない不安要素はあるものの、一頃の不景気は脱して、高校・大学ともに新卒生の就職状況は目に見えて改善されました。しかし、「七・五・三」という言葉が示すように、若者の離職率の高さは相変わらずのようです。

解剖学者の養老孟司氏は著書の中で、仕事とは「社会に空いた穴」であり、「道に穴が空いていた。そのまま放っておくとみんなが転んで困るから、そこを埋めてみる。ともかく目の前の穴を埋める。それが仕事というものだ」と述べています。「自分に合った穴が空いているはずだなんて、ふざけたことを考えるんじゃない」と、「自分に合った仕事」をいつまでも追い続ける若者を手厳しく批判しています。

日本式の年功序列や終身雇用制度は徐々に崩れつつあると言われています。IT化によって、20年後にはアメリカのおよそ半分の職業がなくなっているという研究もあります。「働く」ことの形態は今後もどんどん変化していくでしょうが、いつまでも変わらないものもあるはずです。

「埋めているうちに、穴を間違えたことに気付くということも十分ありうる。そのときには転職してもいい。だけど辛抱してみなければ本当に間違っているかどうかはわからない。その穴が合っているかどうかを判断するのは自分ではなく他人である」とも氏は述べています。

一つのことを辛抱強くやり続けることは実に尊いことだと私も考えています。

夢を叶えよ、Blue Roses

3年学年主任 川口 恭子

61回生の皆、卒業おめでとう。

3年間、いろいろありましたね。人懐っこく、優しい人が多い学年だったと思います。入学当初から、クラスや部活が違う人とも、どんどん友達になっていました。転入生や留学生、留学から戻った人などが何人も入ってきましたが、いつの間にか学年の中に溶け込んでいました。1年生のときは、皆と一緒にいるのが楽しくて仕方がないような感じでした。2年生になると、部長や学校祭の責任者など後輩を引っ張る立場になり、人をまとめることの難しさや人間関係に悩む人が多数いました。3年生は、進路に悩み、無我夢中の一年だったのではないのでしょうか。

そんな中、迎えた最後の学校祭。どのクラスも演劇に決まったものの、夏補習も受け受験勉強をしながらの準備に苦戦していました。文化祭に間に合うか心配していたとき、台風がきて、体育祭が延期になり、文化祭の開催も危ぶまれました。結果的には、準備日が1日増え、劇の完成度を上げることができました。本格的な劇あり、斬新な脚本あり、大道具小道具に凝ったクラスあり、場面転換を工夫したクラスあり、勢いと団結力を見せつけたクラスあり。皆の底力を感じました。

入学当初にした「Blue Rose」の話。「存在しない物」「不可能」だった青薔薇が、10数年前に開発され、「夢叶う」「奇跡」「神の祝福」の花に変わりました。皆も、中学までの「不可能」を、ここ中村でいくつも「可能」に変えてきました。これからの新たな生活でも、多くの夢を叶えていって下さい。

中村で皆と出会ったこの奇跡に感謝しています。

体 育 館

2年学年主任 丹後 茂

3年生61回生の皆さん、卒業おめでとう。

本日、卒業証書授与式が挙行される体育館には、皆さんの思い出が一杯詰まっている事と思います。

最初は3年前の入学式、いやその前の受験や合格者登校でも体育館には足を踏み入れていますね。体育の授業で100タッチした事も、集会や部活動でお世話になったことも思い出の一つでしょう。

中でも最も思い出深いのは、皆さんが2年生の時の学校祭での事件ではないのでしょうか？

床の支えが壊れ、数ヶ月にわたって利用できなくなった時は、卒業式もできないのではと心配しました。事務室の皆さんはじめ、多くの方の尽力により修理ができ、その年の卒業式はできましたが、今年もまた不具合が見つかり卒業式の開催が危ぶまれました。

しかし、多くの大人たちの文字通り「縁の下力持ち」的サポートのおかげで、本日無事に卒業式を迎えることができています。

学校祭でも卒業式でも気兼ねなくステージの上で楽しめたのは、主役である高校生という立場だったからです。また皆さんにとってこの高校時代は、ただ楽しむだけでなく、その足元に周囲の方のサポートがあることも学べた3年間だったのではないのでしょうか。

卒業後は皆さんが周囲を支える力を備えた「大人」になっていってくれることを願っています。

ロバを売るための「自主の庭」

1年学年主任 暮石 全光

ロバを売ろうと父親と息子が出かけた。その、ロバを引いて歩いている2人を見た者が「せつかくロバを連れているのに手綱をにぎるだけで乗りもせずにもったいない」と言う。父親は息子をロバに乗せ、よしと言って歩き出すと、別の者が「若うどが楽をして親を歩かせるなんてひどい」と言う。父おやがロバに乗り息子が歩くと、また別のめを持つ者が「自分が楽をして子供を歩かせるとは悪い親だ」と言う。2人でロバに乗ると、また別の考えの者が「2人とも乗るなんてロバがかわいそうだ」と言う。父親と息子は棒にロバをくくりつけ吊り上げて2人でかついで歩くと、不自然な姿勢を嫌がったロバが暴れた。不運にもそこは橋の上、やっとのことで運んだロバは落ちて流された。

これまでは多くの人に支えられ高校生活を送ってきた。いろいろな意見や考えを体の中に染みこませ、身も心も大きく成長した。しかし、他人の意見ばかり聞いて、主たい性のない行動をとると、ときに痛い目に遭う。自主の庭で培った精神をいかし、他人の意見を聞きつつも信念を持ち、様々な場で活躍してほしい。

卒業。また2度目となる別れがやってくる。胸が張り裂けそうです。しかし、青バラ学年。夢を叶えるための旅立ちの日。笑顔で送りだそう。司会者として……。

ある朝ドラに思う

生徒指導部 滝 恒太

“If some decades later you look back on your time with us here and you feel that these were the happiest days of your life, then I must say your education will have been a failure.”

「もし何十年後かに、あなた方が学校生活を思い出して、あの時が一番幸せだったと感じるのなら、私はこの教育が失敗だったと言わなければなりません。」

これは、朝ドラ「花子とアン」でブラックバーン校長が卒業生に贈った言葉の一節です。この言葉は「最上の時は過去ではなく将来にあります」と続いていくのですが、その時を手にするために必要な指導とは何でしょうか。

学校において「指導」とは生徒の生活に雨を降らせる事だと感じています。誰もが晴天を望んだとしても、雨なしでは作物は育たず、実りは訪れません。そして、学校という場では生徒を育てるために、生徒の問題、変化を捉え、雨を、時として豪雨の如く降らさねばなりません。

卒業は花です。しかし、その花を咲かせるためには「失敗という種」と「指導という雨」が必ず必要です。だからこそ、卒業という花には何にも代えがたい価値が宿るのです。

これからの人生、辛くても過去ではなく未来を見ることです。

虹を架けるためには雨に耐える必要があるのですから。

秋の大学見学 ～中京大学八事キャンパス・愛知学院大学名城公園キャンパス～

10月26日(水)、47名のPTAと教職員が参加し、日頃見ることのない大学の中身を見学しました。名駅を出発し、まず八事の中京大学へ。はじめに工学部棟を紹介してもらいました。最新の機械が並ぶ、油のにおいもしない教室には驚きました。普通棟も大変きれいで、充実した図書館、国際交流室など、多くがガラス張りで作られています。「気づき」の機会を作るためだそうです。センター試験会場にもなる中京大ならではの当日の注意事項も教えてられました。



昼食をはさんで午後は、名城公園に新しくできた愛知学院大学へ行きました。名古屋城を臨む絶好のロケーション、見晴らしのよい講義室で説明を受けました。経済学部、経営学部、商学部の学生が学んでいます。愛知学院には多くの学部がありますが、学部の詳しい説明がありました。新築2年目の校舎はきらびやか、食堂が3つもあります。



来年度もPTAとして2度の研修旅行を計画しています。是非お出でください。

PTA名南地区研修会報告

平成27年度のPTA名南地区研修会が、1月29日(金)ウインクあいちで開催され、本校から15名が参加しました。今年度は講演とともに、松蔭高校、中川商業高校PTAの活動報告がありました。ここではNPOいのちをバトンタッチする会代表の鈴木中人氏による講演「いのちを大切に作る心を育む」の要旨を掲載します。

鈴木氏は娘さんを小児がんのため幼くして亡くした。3歳で発病、手術と抗ガン剤の治療は2年間続いた。一時退院したものの毛髪は全て抜けた。その後、脳、骨への転移。余命数ヶ月と宣告された娘さんをおんぶしたとき、あまりに体重が軽く、死ぬだろうことが実感された。全身に転移して、増していく苦痛をとるためモルヒネを投与した。それでも娘は苦痛にうめいた。「もう頑張らなくていいよ、行きなさい。」娘さんは6歳で亡くなった。今、鈴木氏は生徒を自殺で失った学

校で講演し、同じように娘のことを話し、逆縁のつらさを伝える。死んだら生き返らない、命を大切にしよう、絶対にお父さんやお母さんより早く死んではいけない。死にたいという子は、絶望的な孤独感を感じている。寄り添い、支え合い、家族の絆を大切にしよう。今日はみなさんへ、いのちのバトンタッチをしました。

